

川を改修して田んぼを作り、笏谷石を掘り出し、岡本の紙すきをひろめ……とたくさんの仕事を手がけた方々。

このオオトノウジが味真野（越前市）に住んでおられたころ、河和田を見まわりに来られたんやと。



河内の桃の木谷でな、村のもんが小さい桃をあんまりうまそうに食べていたんで、川むこうの木を一つとろうとされた。川におりて渡ろうとされたら、足がすべって冠が岩の間に落ちてこわれてもた。こんな山なかでどうしたもんやと、お供の人もあわてたんやが、村の主が、「川の川下片山と川上片山をめぐりをする村がいます。そこでおおさせはいかげしょう。」と、申し上げたと。

こわれた冠を手にした片山の人は、村の神社にお参りして身を清めてから、うるしで美しい冠にぬりあげた。冠にそえて、自分の作った三つ組のお椀をさしあげたんやと。飯椀、汁椀、煮物

椀どれも気に入られて、『片山椀』って名前をつけとくれたの。もっと沢山作れとおっしゃった。これが片山の漆器が盛んになるはじめやったと。

越の国をどよりも進んだ国にしたオオトノウジの評判は中央にも伝わった。五十才をいくつも過ぎてから、天皇になつてくださとお迎えがきた。第二十六代の継体天皇といわれたお方々。

④1 技をぬすめ

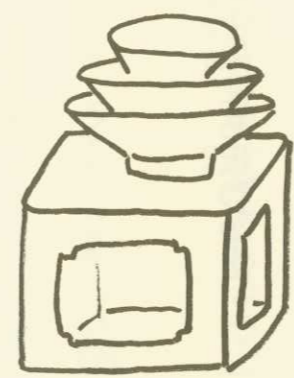
徳川幕府は、江戸のお城で諸国の大名を招いて、新年の宴会を開いた。加賀の殿様前田公は、国元の輪島で作らせた朱盃を配って御国自慢をした。越前の松平公はうらやましかった。あの技を越前にもとりいれたかった。

そこでスパイを輪島に送り込むことになった。幸助、五助、嘉助の三人が選ばれて、輪島に忍び込んで、五年で技をおぼえて帰れといわれた。

一人は小松、二人は金沢の商家へ下男として住み込んで土地の言葉を覚えた。一年たって三人はめざす輪島に入った。そして、漆屋に住みこんで下男として熱心に働いたので、みんなから重宝がられ信用されて、一年もたないうちに、仕事場で手習いも受けられるようになった。三人は一年に一度だけ、祭りの晩に会うことにした。三年目には一人前の技を身につけたので、祭りの晩別々に輪島を抜け出すことにした。

主人の家の娘と恋仲になった五助は二人で輪島を出た。みんなは三年前の奉公先にもどって一時身を隠した。

ところが、嘉助は約束を破って一日でも早く帰宅しようとい急いだので、安宅の関で張り込み中の役人に見つかって、切られて死んでしまった。それから一年たって、五助夫婦と幸助は無事片山に帰りついて、椀づくりの指導者となって活躍したということだ。



④2 おこない

例年のことながら、河和田の新年は、年頭日ときめた「おこない」で、一気に盛り上がる。でも、おこないが何時ごろ始まったかを知る人はもういない。

片山の漆器神社には、元和三年（一六一七年）から書き継がれている「神田帳」という記録があるから、ここはもうも四百近く続いているらしい。木地師が一人前になれたよろこびを村人にも分けようと、神田からとれた糯米で餅をついてお祝いしたのが始まりとか。江戸時代には、正月十五日の朝六時に左義長をはやし、昼の二時に神前で祓をつけて餅をまいたという。

では百姓の村はどうだったか。北中は、明和の頃（一七六四〜一七七二年）から正月十

上河内のもちつき唄

